言霊詩篇　黒書

春夏冬　直樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
言霊詩篇　黒書

【Ｎコード】
Ｎ０８４０Ｑ

【作者名】
春夏冬　直樹

【あらすじ】
今までに書き溜めた詩の中から黒をイメージするものをまとめてみました。かなりダークなものも　あるかもしれません。

虹橋の向こう側

この世とあの世の境目に
流れるは三途の川
黒い水銀のヌラリとしたあやかしの煌めき
流れる先は何処へ参る
この世の生者はその形骸に別れを告げて
虹の橋を渡りて、あの世へ向かう
あの世は良い所、暗い所
眩いこの世の光に誘われ舞い戻る
目下に流るる三途の川にわたって来た筈の虹橋は無く
渉るに渉れぬあの世とこの世
亡者の魂は何処に流るる
果ては地獄か天国か
雨上がりの虹の橋
向こう側には何がある

向こう側には亡者の世界

紅い三日月

錆付いた失望が腕に巻きつき
腐敗した達成感が靴底に粘りつく
夕暮れの晩に東の空に引っかかる血の滴り
己の暗闇に滲み出る罪悪感
明日の光は蒼いのか
明日の闇は紅いのか
夜という暗い霧の彼方に
夜明けの晩が来る
いつかその身をさびたナイフに換えるまで
月は紅
人の心の性を削りだす
滴るその血が蒼く変わるまで

††††††††††††††††††††††

† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †

骨砂の海

漆黒の光が降り注ぎ
轢きつめられた泡沫の夢を溶かした白く輝く骨の砂
生者が紡ぎし欲望の糸のような風の吹く中
足に絡み付こうとする亡者の欠片
地獄の猛火に焼かれて乾ききった海原に響くその音は
心の壁面に髪の毛ほどの皺を作り
憎しみの樹液を擦り込もうとしている
この世界のすべては骨の砂
ちりちりと音を立てて流れ行く
死して骨砂の海に沈もうか
生きて骨砂の海で溺れようか
あの世とこの世の境目に生まれし我が魂の行き着くところは何処

真実

天は人の上に人を創る
地は人の下に人を創る
空くことの無い欲望を自らの力と箇閲し
己の器を忘却の彼方に捨て去り
生まれながら痴気に曝され
自らの心理に惑わされる
儚い人の夢はパンドラの箱に閉じ込められた
希望という幻に陽炎のごとく揺らめく
人は生まれたままの姿で生き
ただ土へと帰るだけ
死んでいく魂は何処に彷徨うのか

†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†

シアワセナトキ

朝の目覚めが透き通った水晶のような時
笑って眠りにつけた時
細い小道の塀の上に丸い目をした猫と逢った時
大好きなイチゴを食べた時
夢の中で色の付いた花を見た時
親しい友人と久しぶりに会った時
時の流れが止まったように感じた時
父親が死んだ時
母親が死んだ時
目張りされた狭い車の中で紅く輝く練炭の光を見て眠りに就く時
電車に飛び込んだ人を見て自分がまだこの世にいることを実感できた時

誰かが私のことを思っていてくれる時

††††††††††††††††††††††

朝の香り

夕べの空想の欠片が淡い真綿色をした羽状の煙になったとき
僕の朝は音を立てて動き出す
指先の稀有な感覚にこの形骸は拒絶する
ただ、その瞼の中に忍び寄る色の無い光と
朝の微香が化石と化した魂を揺さぶる
生き歳生ける物はみな朝の香りの奴隷となり
その終わりを迎えるまで
繰り返される

††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††

雷光

神の後光が明るく照らす
忍び寄る得体の知れぬこの世の者でないもの
生命の源となる水の支配者
天空を覆いつくす形の無いもの
この空間に満ちた空気
肌を刺激する具象の餓鬼達
耶麻（やま）たなる感覚に身を没し
生根（せいこん）のきらめきをここに欲する

††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††

夢遊

三笠の香りに満ちたこの夕凪
櫻の萼（がく）に別後（べつご）の花弁
双樹（そうじゅ）に縊（くく）りし蔦（つた）の痕（きず）
先刻（せんこく）の漣（さざなみ）に呑まれた霧雨のように
世の苦渋を燻（くすぶ）す
霙（みぞれ）降りし空暗く
明日の昨夜に囁（ささや）きもせず

††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††

涅槃

真昼の輝く太陽のような漆黒
新月の夜空の様に暗い燦然（りんぜん）
人の心の裏側に巣くう蟻の行者
悲しみの顔に縋（すが）り付く亡者が笑みの眉開く
夢の手毬を裏に入れて
身躯（しんく）に一咫（いっし）の線を引っ掻き
吾身（ごしん）の憂鬱を継がふ

††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††

季の欠片

陽光の如月
流離(りゅうり)する浮き船
先覚(せんかく)の言の葉
亢竜(こうりゅう)なるものの夢の戯言
弥四(やよ)に群がる童(わらべ)
昊天(どんてん)に輝く九紫(くし)の紅(くれない)
季春(きしゅん)に綻(ほころ)ぶ桜
更紗(さらさ)を着て済勝(しょうかつ)

幸福

浮遊する記憶の彼方に漣のように細かく弱々しい幸せ
冠絶（かんぜつ）な能力も波に打ち砕かれた白き泡沫のように乱舞する
妖教（ようきょう）の焔（ほむら）にも似た古（いにしえ）の魍魎の輝く力
これらが巧拙な知識に惑わされても己の未来に道があるように錯覚
するとき
私はそれを幸福と呼ぶ

††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††
††††††††††††††††††††††

存在

誰かが私を見つめている
だからこの世界の羽音が聞こえる
暗い闇の中にいても
一筋の光の糸が私の腕に絡み付いてくれる
剥がれ落ちる皮膚を縫い付ける
空虚な心に暖かい雨が振るように
いつか行けるだろうか
そんな存在が手に入るのだろうか
今はまだ
見つけられない
見つけてもらえない
いつか私を見つけて
私がこの世からさよならを言う前に

† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †
† † †

家族団欒

罵詈雑言の滴る夕餉（ゆうげ）
面相の遊走（ゆうそう）に寒い微笑
湯気の赤壁に猟奇の志気
奇異なるは我が腕の慟哭
軽蔑の叱咤に笑いの仙郷
枠の内なる御許（みゆるし）に奇跡を所望する

†††††††

月下の骨

誰も私を見ない
ただ其処に転がる石の如く
硫酸の雨がこの身を溶かす
私を彩るものは何もなくなる
風の音が静かに響く
蒼い月明かりがこの世を浸す
白く輝く骨になった私
煌く輝きだけがこの世界の一部となる
生あるものに妬みと嫉妬を抱きつつ
ひたすらに月の光に問いかける
私はここにいる

†††††††

†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †

理由

私は今生きていることを実感できる
それは彼の贈り物のお陰
生きている証が知りたくてリスカしていた私
そんな私に彼は中華包丁をプレゼントしてくれた
血を見たかったらこれを使ってごらん
二度と見なくてもいいぐらい生きている証が見られるから
そう言う彼の指は五つまでしか数えられなかった
いつまでも眠っていたいと言ったら
よく切れる剃刀をプレゼントしてくれた
これを首筋に当てて切ってごらん
生暖かい血が流れてすぐに眠れるよ
永遠に目覚めることの無い眠りに
そう言う彼の首筋にはぱっくりと割れた傷口があった
人と会うのが嫌いと言ったら
彼はピカピカに光ったフォークをプレゼントしてくれた
これでその瞳を抉り出せば人の存在が消えてしまうから
そう言う彼には瞳が無かった
そんな彼の形骸を見て私は思った
私はなぜ生きているのか
それはただ・・・彼のようになりたくないと気付いたから
幻覚の中にいる彼の声がいつも私を黄泉の世界に引きずり込もうとしている
それから逃れるために私は生きている
それが私の生きる理由

偽神

人の欲望に蔓延る蟲のごとく
罪の陰に隠れる漆黒の水飴
常識の欠缺に気付かない賢者が自らを誇張する道具
己の希望を必ず叶える絵空事の擬人
有る筈の無い思想の欠陥
信じるものが救われない
裏切りの影に縋る金色の輝き

†††††††

永遠の終わり

自らを助けるため
そんな大義名分
ただただ、楽になるんだと思い込んでいた
だけど、本当は違っていた
どんなに苦しみのない方法だとしても
それは肉体に関してだけ
死を迎える瞬間は途轍もない苦痛が魂を苛む
そして時の流れが遅れだし、無限の時へと変わって
終わりのない時間の輪の中で
ただ魂の苦痛のみが続く
果てることのない苦痛が
そんな永遠の終わりのなかで
彼の叫びが私を救い出した
私は有限の世界へと舞い戻った

たとえ苦痛の満ちたこの世界の中でも
永遠の終わりに比べれば他愛もないこと
彼はそれを私に教えてくれた

衝動

内なる悪魔が目を覚ます
総てのものを壊したい
私以外の総てを
シアワセナトキを過ごす人間
オトコと呼ばれる生き物
切り裂きたい
迸る血の雨に降られながら
首筋の生肉に喰らいつき
はらわたの髪飾りをして
生皮の仮面で踊りを踊る
月の光が闇に消えるたびに
いつも私を苦しめる
体から流れ出す血の仕業
私を駆り立てるこの衝動

オトコには永遠にわからない

†††††††

首灯篭

おやおや、おぬしは新参者じゃな
近頃、ここに来るものはめっきりと少なくなったものを
何を好き好んでこんな所へ来たのじゃ
それにしても汚いのう
こんな汚い切り口は初めてじゃ
何にも作法を知らない素人か
そもそも自害とは殺されるものの最後の抵抗
殺されるのではなく自らその命を絶つという抵抗
されど、それには強靭な精神がなければだめじゃ
おぬしは割腹の痛みに耐え切れずに顎を引いた弱虫
だから介錯の太刀筋がこんなに何回も
顎の骨に引っかかり
なんと汚い切り口じゃ
あそこに輝く首灯篭
あんなに神々しく光るのは
礼儀正しいつわものよ
それに比べておぬしのなんとみすぼらしいことよ
おぬしなんぞ、そこの枯れ木に曝す頭となれ
言霊を信じ切れなかったお前の末路じゃ

絶対な物

例えば形の良い木に少し太めのロープを括って
足場には大きな石を三つ重ねましょう
実行するときは勢いをつけて１５分でお望みどうり
狭い空間で練炭焚いて眠りの薬で誤魔化しましょう
いつの間にか終わりです
動く電気の箱に飛びつきましょう
一瞬の苦痛と最大の苦しみの後、人ではなくなっているでしょう
鳥の真似をしてあの大空を落下しましょう
関係のない人まで巻き込まないように
そんなことをしなくてもいつか人は必ず死ぬんだ
この世の中で絶対なものがあるとすれば
それはいつか来る死
死にたければただ待っていればいい

経典

私の咽元に突き立てられた水銀のような煌きのナイフ
その刃から放たれる妖狐の爪
滲み出る恐怖と失望の雫に
歪んだ息遣いが響き渡る
善も悪もその真髄を失い
ただ、生の触手が心臓に絡みつき
悪の舌が脊髄を嘗め回す
己の鬩ぐに苛まれ
人としての形骸を捨て去っている
されど魂は霧の鉾となりて
誰かの殻を打ち抜かん

†††††††

†† †† †† †

朧月夜

威厳を放ち輝く蒼月
強き光はまるでベールで覆われているかのように夜空に広がり
月虹のリングを冠にして私を見下ろす
冷たく肌を差す風に身を震わせて
君の去っていた彼の地を眺めんとする
願わくば私も連れいって欲しかった
しかし、叶わぬ夢の幻
一人この地上に残された私は
この横笛で思い出の彼方のあなたを偲ぶだけ
いつか年月が年輪のように過ぎ去った後
私の魂だけでもあなたの傍に飛んで行こう
天界の海を光の筋を残して
あなたの傍に飛んでいこう
あの空に輝く朧月へ

薬

先生はなぜこんなにも薬をいっぱい飲めというの
私の話の半分も聞かないのに
何で私の病気がわかるの？
そこに置いてある分厚い本に書いてあるの？
その本の中に私のことが書いてあるって言うの
馬鹿にしないで
本当はなんにもわからないくせに
わかった振りをして
何でも良いから薬を手渡して
これを飲んでいれば直るかもしれないと
何度私をだませば気が済むの
こんな薬何の助けにもならない
ただ自殺を助長するだけ
どこかのお偉いさんが言っていたよ
本当は薬を飲んでいるから病気になっているのかも
苦しくても勇気を出して薬を飲まなくなれば
私は助かっていたんじゃないの
今からでも遅くない
自分の力を信じよう

鬱

煮えたぎる熱き血の海の奥深くで
永遠に溶けぬ氷の剣
誰を殺そうとしているのか
何を壊そうとしているのか
何も分からないまま
氷の剣に手を伸ばす
闇の中で見えない壁を探す
切り裂いても切り裂いても
幻のようにただ揺らいでいる偶像
助けを呼べども響かない遠雷
自分ひとりの姿さえまほろばの蜃気楼
差し込まれる僅かな光に泥の煙を巻きつけ
漆黒の扉に鍵をかける

† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †

スターダスト　ドリーム

あの流星の尾にまたがり遥か彼方の宇宙を目指そう
そこには見たことのない星星が宝石の輝きを放ち
幾多の生命を育む異世界の楽園
遠くに光る地球の青い輝きは星の海に見え隠れする灯台の光
砕ける波は星雲の輝き
静けさの中に熱き光がこの身を焦がす
時の兎が時空の彼方に飛びはね
漆黒の蛇が惑星を包み込む
貴婦人の胸飾りは怪しい光を放つ
魂の旅は永久に続く

†††††††

この広い大地の果てで

ひたすら歩き続ける
何処までも
何処までも
この広い大地の果てを目指して
そこに何があるのか
どうしても見たくなった
突然目の前にそれは現れた
何もない空間
そこは世界の端っこ
そこから先には何もなかった
偉い先生は世界は丸いといっていた
けれども僕は自分の目で見てみたかった
本当はどうなっているのか
誰かの言っている事が本当のこととは限らない
自分の目で見てみなきゃ
だって世界の果てが何もない空間なんだから
本当に何もないんだろうか
まだ何かあるかもしれない
僕は世界の端っこから飛び降りた
僕は無に戻った

波一つない湖の底から

深き緑の森に囲まれた静かなる湖
水面をそよぐ風も
空を行く鳥達もじっと息を潜める
微かな音も湖の深き水の底に吸い込まれる
生き物も住まず
ただ透き通る水を湛える
誰も来ないこの湖の底で
ずっと一人
人間からは神と崇められ
されどいつも一人
この水の呪縛から解き放たれたい
美しい森の迷宮を抜けて
艶やかな衣を纏い
暖かい日の光を浴びてみたい

† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †
† †

命の賞味期限

昨日まではなんでもなかったのに
突然、災いはやってくる
いつもの疲れなんだと自分に言い聞かせ
なんでもないんだと錯覚したかった
だけど、今までとは違う
もしかしたら…
けれども誰も何も教えてはくれない
単なる疲れだからと
医者も家族も
みんな何を隠しているんだろう
そんなに私のことを惨めな人間だと思っているの
私は本当のことが知りたいの
命の賞味期限が切れているのならば
どうか教えてください
これから先、命の消費期限が来るまでに
私はやらなくてはならないことが一杯あるの
無駄に時間を浪費したくないの
治ることのない治療
そんなことをするより私のこの痛みを止めて
残される人たちに私の言葉を残したいの
私が生きていたという証が残したいの
暗い病室で苦しむのはいや
だから私の命の賞味期限を教えて
この命が神々しく輝くために

救いの手

無限の空間から助けを呼ぶ声が聞こえる
鎖に縛られた心を解き放って
自由に飛びたてる翼が欲しい
叫ぶ声は霧の触手と化して僕の身体を動けなくする
僕に君を助ける力は残っていないんだ
蠢く虫達の沼から今這い上がったところだから
君を助けたい
出来ることなら
骨になってしまった僕の腕で
君を抱きしめたい

†††††††

†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†

現実と空想の狭間

降りしきる雨は鋼鉄の玉
風の音は歯を削るリューターの音
足に染み込むはケルベロスの唾液
顔を撫でる茨の指
目に入る光は消え逝く魂の燐光
手に触れるは虫達の足音
身体を流れるはコールタールのヘドロ
総ては心が作る妄想
現実ではない
けれども現実も総てが空想
本当のことなど誰にも分からない

†††††††

†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †
†† † †

天気輪の柱

冬空の厚い雲が春の女神の吐息に
その身を包む衣を一枚一枚はがされていく
まだ冷たい風の妖精が舞い踊る丘の上より
遥か彼方の海に天気輪の柱が建つ
雲の切れ間から差し込む光には
神々しい温かさが募る
光溢れる海の面に
魚の喜ぶ声が木霊する
春の訪れの予兆
硬く閉ざされた冬の季節は
あの天気輪の柱の光で溶かされていく
魂の行く末もあの天気輪の柱のように温かくなりますように

†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†

躁

何もかもが光の中に浮き上がる
七色に輝く意識の中で込み上げる喜びに体が震えだす
世界が自分を中心に回る感覚が神経を躍らせる
偽りの笑顔が周りの人を騙す
なんて心地のいい温かさ
体を縛り上げる鎖が砂糖菓子のように溶けだす
浮き上がる体に取り留めのない衝動
鉄塔の肋骨の背に立ち
剥ぎ取れた羽根を羽ばたかせて
僕は大空へ飛び立つ
魂は鳥のように飛び立ち、抜け殻は土へと還る

†††††††

†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†

色眼鏡の仮面

私の体を突き刺す無数の視線
耐え難い苦痛を防ぐために私はサングラスをかけている
深々とかぶった帽子の下からいつも色の付いた世界が見える
子供のころに見た眩しいほどの明るさの世界は今はないけれど
暗闇の増えた今の世界も悪くはない
見たくないこの世の醜いものも
感じたくない妬みの映像も
影を薄めているから
人はいろいろな仮面をかぶって生きているのだと思う
それが私の場合、色眼鏡の仮面だっただけ
私は生きることを望む
たとえどんな仮面をかぶることになっても

舞砂

崩れゆく廃墟にただ一人
足元の石は脆く砂に変わる
人影は暗闇の中に逃げていく
僕は一人なのか
叫ぶ声は湿った空気に吸い込まれ
肌は宙を漂う鬼虫に蝕まれる
魂の屍が累々と散らばり
星の光はカマイタチのように頬を切り裂く
流れる血は温かくもなく
手に触れる茨は蛇のように絡みつく
僕の屍を見つめて
腐りだした腹の中からは地獄の使者が顔を出す
固体から液体に代わるとき
白き骨が光り輝く
時間が地の底に落ちるころ
風に舞う砂となるだろう

忘却の彼方の私

春の暖かさがみんなのコートを剥ぎ取っていくのに
私はまだ分厚いコートを羽織って震えています
この世界の端から落ちてしまった私には太陽の温かな光が届きません
すでにからだは氷に閉ざされ
心も冷え切っています
何も感じることができません
何も考えることができません
何もできない私はただうずくまっているだけです
誰かが助けてくれることを願っていたのははるか昔
今は誰も来ないことが普通だと思うようになりました
人として生きるとか温かい心とか
すべて忘れてしまいました
生きていることさえ忘れてしまいそうです
存在すらないのかもしれないと
けれど、同情はしないでください
同情は何の助けにもならないということを痛いほどわかっているつもりです
私は何でここにいるのでしょう
ここはどこなのかもわからなくなっています
私にはもう言葉しか残っていません
言葉だけが私の姿
いつかは言葉も忘れて
私が本当にこの世から消えることになるかもしれません
そうしたら皆さんは悲しまないでください
だってそんなことはこの時代のほんの一瞬の出来事に過ぎないから
あってもなくても時代は変わらないのです
私は誰なんでしょう

雪割草

春一番が吹き抜けるこの樹海の谷間に雪の中から顔を出す雪割草
冬の厳しい寒さにも耐え忍び
春の訪れを喜ぶように咲き誇る
そんな雪割草の傍らにそっとからだを横たえる私を見つけてください
秋の終わりに迷い込んだ私の心はまだここに残っています
誰も私を見つけてくれなかったから
私は雪の下で眠りにつきました
やっと空が見えるようになりました
誰か私を見つけてください
雪割草の花の傍らに眠っている私を

†††††††

天動説

海の中に太陽が沈んでゆく
丸い灼熱の玉が海の水を蒸気に変える
煮え立つ海には魚も消え地獄の釜のよう
空に上る蒸気は白い雲となって風に乗る
沈みきった太陽
暗黒へと変わった世界には
反対側の海から顔を出す丸い月
少しずつそれへと這い上がってゆく
いつしか空には野次馬の星たちがおしゃべりを始める
丸い月は星たちのおしゃべりに耳を傾ける
いつしか地平線に近づく月は名残惜しそうに赤く燃えながら海へと
沈む
反対側の海からはまたたくさんの泡が吹き出し太陽の到来を告げる

人は人を殺す

僕は人を殺したことがある
正確に言えば死んでいく彼女をただ見続けただけ
彼女は突然僕の前に落ちてきた
ビルの屋上から世界に別れを告げた彼女
頭の半分がコンクリートですりつぶされ
血も内臓も脳髄も薔薇の花びらのように飛び散る
手も足もまるでマリオネットの糸が切れたよう
服の裾はめくれ上がりあらわな姿になっていた
それでも彼女は息をしていた
僕を見つめる彼女の目にはひとすじの涙が流れた
僕は座り込んで彼女に言った
「死に逝く君はなぜ生を望む」
彼女の目から灰色の魂が抜けていく
天にも昇らず
地にも帰らず
そこにはただ、死体が転がり
僕は人殺しになった

The square world

この四角い世界の中で人はなぜ戦うのだろう
何もかも四方の壁にさえぎられた閉ざされた世界なのに
人は憎みあい殺しあい悲しむ
地面の土は骨の砂でできていて
空に浮かぶ雲は魂の煙
最初から人なんて生まれてこなければ
こんな事にはならなかったのに
なぜ神は人を作ったのか
ただの暇つぶしのゲームなのか
神が人を作らなかったら
私もこんなに苦しんだりはしないのに
神は壁の向こう側で何をしている
人は壁のこっち側で殺し合いをしている
私はただ言葉で嘆いているだけ
平和な世の中って何だろう
たぶんそれは人のいない世界のことなんだね
私にはとても辿り着けない世界

だからここで詩を書いている
報われない希望を夢見て

雨降る晴天の日には

今日の空のように暗く雨の落ちてくる晴天の日は
溜まった服を洗濯しましょう
春の訪れとともにぬるくなった冷たい水で
汚れを落としましょう
洗いあがった洗濯物は冷たい風の吹いているベランダに干しましょう
滴り落ちる水のしずくは雨と混ざり合い
乾くことのないシャツの皺をよく伸ばしましょう
降り続く雨の中、雨雲にさえぎられた日の光を浴び
希望のない明日へ向かって
大きく伸びをしましょう
私はこの雨の降る晴天の下、彼の帰りを待っています

不老不死

昨日の幻想が夢の中でゴミ箱に押し込まれて
目覚めた今日の朝
重苦しい空気の中、窓の外を眺める
そこには青い空も泣く
深呼吸をして肺の中に無理やり空気を押し込み
今日の幻想が始まる
少しずつココロに隙間ができていて
そこからいつも悪夢が染み出てくる
いつしかその隙間は皺となって
私を気力のない老人と変化する
永遠の若さがほしい
死なない体がほしい
夢を見ない心になりたい
幻想はもう飽きてしまった

†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†

滴る言葉

漆黒の闇の中に横たわる女神の瞳
淡く輝く希望のともし火の向こう側に見えるものは
底なしの沼におぼれる大人になれなかった子供たち
いつも何かに不満を持ち
何につけても不平を言い続け
なのも変化しない子供の大人
なにも変わらずなにも変えない
女神の瞳に滴る涙はそんな彼らの憂いを悲しみ
いつしか黄色に輝く泉へと流れる
流れ落ちた憂いはいつしか褐色のヘドロに変わり
大人になれない子供たちのおぼれる沼へと流れ着く
永遠の苦しみの中、子供たちの目から溢れる涙は
いつしか言葉の塊となって風に漂っていく
風に漂う言葉はいつか空に上り雲となり銀色の雨を降らせるだろう
銀色の雨はやがて女神に降り注ぎ
その髪をつたって滴る雨はやがて悲しい言葉に戻っていく

紺碧の血

崩れかかった幽霊を映し出している目の前の鏡
こぶしで殴りつけた
鏡は大きな音とともに僕の体の一部を剥ぎ取っていった
飛び散る鏡の破片の中に混じって
僕の紺碧の血が深い海の底よりも冷たい光を放っている
鏡に映る僕の姿はぼさぼさの髪と目の下に出来た隈
生きているのか死んでしまったのか
今はどうでもいいことだ
手から流れ落ちる血が洗面所の白い空間を腐敗させていく
この体からすべての血が流れ出したら
次は何が流れ落ちるのだろう
助けを呼ぶことは当の昔に壊れた
光を求めることはもう体が拒絶している
このまま、崩れゆく体をひびの入った鏡で見続けていくだろう
歪んだ自分にあざけ笑いながら

死夢

夢を見た
いつものように親友と学校帰りの電車をホームで待っていた
周りには会社帰りのサラリーマンや学生でいっぱいだった
彼女はいつものように取り留めのない会話で笑っていた
駅のアナウンスが快速列車の通過を知らせる
彼女は不意に線路に背中を向けて言った
「さよなら」
私はそれに答えていた
「さよなら」
彼女はそのまま後ろ向きで線路に倒れこんだ
電車の存在を告げる光がホームに差し込んでくると同時に辺りには
地獄の番犬のような警笛が鳴り響いた
次の瞬間彼女は姿を消した
電車から亡者の叫び声のようなブレーキ音が鳴り響き
レールと車輪が摩擦によって地獄の業火のようなきらめきがホーム
と電車の隙間からこぼれていた
通り過ぎるはずの電車が止まることを拒絶しながらホームの端に止
まった
私の目の前を通り過ぎた電車の陰からは
以前から見慣れたホームの向こう側の壁が現れた
そこにはさっきさよならを言った彼女の頭だけがこちらを向いて横
たわっていた
少し笑みをこぼしながら
レールのそこかしこに元は体だった物体が散らばり
赤く染まったジュータンのようになっていた
ホームからは悲鳴が上がり時間が凍りついた
私はなぜかもとは彼女だったその頭に笑顔を送った

そこで夢が覚めた
月に一回はこんな夢を見る
死に対して何の感情も抱かなくなってしまう
たとえそれが自分であろう

新月の夜

夜の世界を支配する月の神
彼のいない新月の夜には魑魅魍魎の天国への扉が開く
夜空に輝く星たちは弱弱しい光を放ってただ震えているだけ
私の体に流れる黒い血たちも
こんな夜は騒ぎ出す
求めるものは他人の赤い血
この漆黒の大地を真っ赤に染めて立ち上る湯気のカーテンの中を
ただ、歩き続ける
所詮、私もただの殺人者
赤い血を見なければ魔法が解けてしまう
この手を赤く染めていなければ
生きていることが実感できない
生きている・・・
それに何の価値があるのだろうか

過去に置いてきぼりの左腕

赤い月の光に照らされて動きを止めた僕の左腕
脈打つ血管は色白の蛆虫の住処と変わり
乾ききった皮はめくれあがって花びらのようになっている
黒く変色した筋肉はコールタールの雫と変わり
奥底に隠れていた白く輝く骨はケタケタと笑い声を上げる
それでも僕の体から離れることはなく
悪臭の血塊を真の臓へと伸ばそうとする
いつのころか生きている証が見たくて
銀色のナイフで傷つけた僕の左手
過去の涅槃の棚に置き忘れてしまったことにやっと今気が付いた
もう生きているかなんてどうでもいいや

心臓に打ち込まれた楔

紫色をした月の上る夜には
心臓に打ち込まれた楔から
タンポポの黄色い色をした
悲鳴が毀れてくる
硬く閉ざされた心臓を
こじ開けようと
誰かが無理やり叩き込んだ楔
誰も私の心臓には入り込めない
愛しているといったあなたの
その偽善に満ちた薄ら笑いの仮面の下の剃刀のような目から
私はこの身を守るために鎧を着けた
たとえ私が死んだとしても
たとへ魂の抜け殻となっても
この鎧は存在し続ける
神がこの世の終わりを作ったとしても
この心臓に打ち込まれた楔は
朽ち果てることなく
未来永劫に生き続ける

百百来来（ひゃくひゃくらいらい）

偽りの死の香りに誘われて目が覚めた。
希望と失意の花びらが散る言葉の草原の中
僕は悲しみと喜びを感じた
手が届きそうなあの世界の入り口を見ることもなく
そして・・・
百の空の向こうには希望が待っているのか
百の言葉の向こうには
安らかな世界が待っているのか
僕の死はまだ来ない
誰かの死もまだ来ない

†††††††

†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†

赤い花

腐海の海に沈む三日月は赤い煙とともに悲鳴を上げている
裸足の足に絡みつくヘドロの海は青い瞳が除いている
風に舞うスカートの裾には
この世に生を受けなかった
迷い子の干からびた手が纏わりつく
絶望も感じない
希望も感じない
信じるものもない
心の欠片が少しずつ消えていく
形骸となった私の体を誰か壊してください
土に還ってあのゴミの山に咲く
小さな赤い花になりたいのです
この汚い世界を見渡す目もなく
厭らしい罵詈雑言を聞く耳もなく

悲しみにくれる悲鳴を出す口もなく
ただ、あなたに綺麗だと言われたい

過ぎ去る時間は人の夢のよう

別にこの世界が嫌になったんじゃなくて
ただなんとなく自分の生きる場所が見つからずに
きらびあかな雑音の渦の中を
静かに眠る光の砂粒を指の隙間からこぼしながら
夜空に輝く虹の架け橋を見つめていた
私がなにもしなくても時代はその時を刻み続ける
一年前の私は何をしていたんだろう
今の私は何が変わったのだろう
なにも変わっていない私が鏡の中に写っている
昔の私と今の私
時の移り変わりは
人が夢見た幻
この先も人は儚い幻の海を泳ぎ続けていくのだろう
いつかおぼれて暗い海の底の沈むまで

RESET　THE　WORLD

いつも世界のどこかで争いが起こっている
人が人を傷つけて
他人の財産を奪い去り
口先の嘘で人を惑わせる
どこかのお金持ちの先生が言った
争いのない世界を築きましょう
そんな世界はどこにもない
それなら一度世界をリセットしてみたら
人のいない過去の時代まで
いっそのことリセットしてみたら

リセット　ザ　ワールド

人の存在しない世界はなんと平和なことか
人の存在こそ悪であるのだから
だからこの世界からリセットしよう
人だけをリセットしよう
世界に幸福が訪れるから

いつかの夢

確か子供だったころの私は
すべてのことに夢が広がっていた
道を走っていればオリンピックの選手になった夢を見ていた
誰よりも早く走れると信じていた
黒い学生服の高校生を見れば
自分もそうなることを疑っていなかった
ドラマの中の大学教授を見れば自分も教壇に立って
生徒を叱り付ける夢を見ていた
なんにつけても自分には壁があるなんて考えてもいなかった
だが、年がたつにつれて本当の自分が見えてくる
どんなに早く走ってもオリンピックには出れない
必死になってやっと入学できた三流高校
大学なんてとてもいけるような頭脳は持っていなかった
それに壁にぶつかることもなかった
壁にぶつかる前に道から外れっぱなしで
いつも堂々巡り
いつの間にか子供のときに見た夢は忘れてしまった
夢を忘れて私は大人になった

叫ぶ声が届かない

鳥がさえずり草木の花がほころぶ
風は温かく空はどこまでも青い
見渡す限りの草原の真ん中で
僕は一人たたずむ
誰も僕のことなど気にしていない
世界は僕に関係なく回っている
時間だけが過ぎていく
なのに僕はここで叫んでいる
自分の心の内を開放するために
僕はここで叫んでいる
けれどその叫び声は誰にも届かない
僕の叫ぶ声は誰にも聞こえない
確かの声を張り上げているのに
僕の声は誰にも届かない
あの僕を拒絶した世界から
必死に逃げてきたのに
この世界でも僕は一人ぼっち
空に浮かぶ青い月はそんな僕を見つめて
いつも笑っている

迷子の心

ほんの一瞬だけ目の前が見えなくなった
ただそれだけのことなのに
僕の心は迷子になった
どこをどう進んでいるのか
どこへ行けばいいのか
なぜここにいるのか
なにもわからなくなった僕の心
道を照らす光でもあればそこから抜け出せるのに
歩き疲れた僕の目には闇夜が広がるばかり
迷子の僕はここで泣いています

†††††††

†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†

古時計

心臓に開いた穴がどんどん広がっていく
何でこんな穴が開いたのだろう
いつもどこでも自分に問い詰めてきた
だけど答えが見つからない
薄暗い部屋の中でいすに座っている僕の前に古びた振り子時計が姿を現した
ボーン　ボーン
時計が鳴ると同時に針が反対周りに回りだす
目の前にはまるで映画のように過去の場面が映し出される
ボーン　ボーン
どんなに過去に戻ってもあたりには暗闇だけが広がっている
ボーン　ボーン
不意にあたりに光が溢れてきた
僕は時計の針を押さえた
その時、目の前には子供のころの自分がいた
明るい顔で笑い、飛び跳ねている
場面は少しずつ現在へと動き出した
誰かの声が聞こえだした
次第にその声は大きくなり罵声へと変わっていった
母親が父親に向かって口喧嘩をしている
突然、母親は子供の僕に振り向いて言った
「あんたなんか生まなきゃよかった」
辺りは漆黒の闇に包まれ、僕は心臓に小さな穴が開いた
目が覚めると振り子時計はそこになく
椅子に座った僕がいた
僕は家を捨てた

親を捨てた

目の前が少し明るくなるのを感じた

存在のない生き方

水音が響くくらい森の奥
僕は一人住んでいる
訪ねる人もなく森の動物たちの声と妖精の囁きを聞きながら
死を迎えるまでここで生き続ける
誰とも話さないこの生活にも少し慣れてきた
人は一人では生きてはいけない
そんなのは嘘だ
生きていくだけなら一人でもできる
誰にも邪魔されない自由な時間の中で
死を見つめることができる
ただ、ひとつだけ心残りがある
それは僕が生きていたことを誰も知らないこと
僕は生きながら死んでしまうこと
そして僕は道端の雑草になった

箱の中のアリス

目に見えるもの総てが偽りのことに見えて
手に取るもの総てが空虚なものに感じて
耳に聞こえる声の総てが嘘に聞こえて
外に出ることが出来ない
この小さな空間から出て行くことが出来ない
自分が何者なのか
外にいるものはどう自分と違うのか
何も分からない
分かろうとすること自体したくない
ここに留まって時間の過ぎるのを待つ毎日
何の刺激もないこの毎日
この状態を維持すれば私は生きていける
馬鹿なこと
時間を浪費すれば死の訪れが早くなるだけなのに
自らが秘める欲望の大きさに何の関心も示さないで
あたかも聖人の様に振舞おうとする
それが正しいと勘違いしている私
そんな私が大嫌いだ

蜃気楼

はるか彼方に見える楽園
見回すと僕の傍には風に吹かれる砂
赤く染まるその砂に沈みながら
天を仰いで叫ぶ
なぜ僕だけがここにいるんだ
僕の犯した過ちが見えない
このまま僕は周りの砂と同じように乾いた風に吹かれて
あの楽園には辿り着けないのか
いつも見えるあの楽園
手が届かない生者の世界に
生きることを諦めた僕は辿り着けない

†††††††

†
†
†

されこうべ

静かに流れる川岸に響く彼女の歌声
遠く近く強く弱く
川の流れのように
時には悲しい歌
時には楽しい歌
時には怒りに満ちた歌
時には喜びの歌
その歌声はいつまでも水面に流れ続ける
心に響くその歌声
あれは子供のころに聴いた歌
あれは恋に破れたときに聴いた歌
あれは夢を叶えたときに聴いた歌
あれは親しい人との別れに聴いた歌
その歌声は頭の片隅に廻り続ける
今も昔もこれからも
彼女は全ての人たちのために
美しい声で歌い続ける
白いされこうべになっても

水中花

沈み行くこの身を淡雪のような気泡が優しく包む
見上げるとそこには揺らめく蒼い空が広がる
水の仲間たちが興味深く私の手足を突く
地上の雑踏はここには届かない
ただゆっくりと過ぎる時間の流れと水の織り成す音だけが在る
この身を縛るものは何もない
体の欲するままにこのまま漂っていたい
たとえ息が続かなくても
たとえ心臓が止まっても
たとえ魂になったとしても
このままこの海の中を漂っていたい

†††††††

誕生日

気が付けば今日は誕生日
何も無いただの一日
過ぎ行く時間の流れを少しの間遅く出来る特別な一日
いつも一人で過ごす一日
なぜか子供のころに一度だけ開いた誕生日会を思い出す一日
なぜ自分は生まれてきたのだろうと悩む一日
風の音がとても寂しく聞こえる一日
人恋しくてキーを打ち続けている一日
人の生活を羨むばかりに一日
この世とサヨナラをしたくなる一日
なぜかわからないけれど溜息をひとつ吐いてしまう一日
一年の中で一番嫌いな一日

バレンタイントリュフ

愛しい愛しいあの人のため
心を込めてチョコレートを溶かす
甘くてほろ苦い魅惑の液体
とろーり溶けたチョコレート
中には何を包みましょう
胡桃やアーモンド、それとも甘酸っぱいチェリー
どれも平凡な感じ
私はもっともっと愛情を込めるわ
いつもあなたと一緒に居たいから
いつもあなたを見つめていたいから
だから私は左目を刳り貫いて
チョコレートで包みましょう
可愛くラップして明日あなたの元へ
中を見てあなたの驚いた顔を

私はその左目で見つめましょう

いつまでもいつまでもあなたのその顔を

許されざる理由

地の果てに炎が立ち上る
空から降り注ぐ白燐光の雨
地を轟かせる雷鳴
這い回る鉛白の煙
逃げ惑う異国の人々
泣き叫ぶサイレンの音

バラバラになった子供の体を拾い集める母親
頭が半分欠けた子供を抱える父親
赤黒い血に染まり泣き叫ぶ子供
聖地に向かってひたすら祈りを捧げる老婆
手にしたナイフをかざし立ち向かう翁

私は彼らに手を差し伸べられない
例え彼らが冷たい大地に眠るとしても
私はなにもすることはない
あなたもなにもしないだろう
誰も何もしないでいる
大地に眠る猫のように

地獄はあの世にあるんじゃない
地獄は今この世に存在する
信じるものの違いだけで
人は人を殺していく

神は彼らを許すのだろうか
私は彼らを許しはしない

そして何も出来ない私を許すことは出来ない
許せない理由は私の中に
許せない理由は信じるものの中に

ア〜メン

凍てつく大地に眠る猫

いつも学校に向かうために通っている公園の片隅
いつもと変わらない風景
いつもと変わらないざわめき
いつもと変わらない匂い

そいつは突然現れた

ある冬の凍える朝に
そいつはぼろ雑巾のように現れた

かすれるような小さな泣き声
じっと私を見つめるその瞳は
私に助けを求めている
私はそいつを助けない

面倒を見るなら一生

それがそいつに対する私の礼儀
それが出来ない私は今は会釈をして
そいつのそばを通り過ぎるだけ

三日後の朝

姿が見えないそいつを探して
道の脇の入り込む
そいつは静かに横たわっていた

凍てつく大地に眠る猫

私もいつか凍てつく大地に眠る日が来るだろう
そのときは一緒にこの大地を駆け抜けよう
ねこじゃらしを追いかけながら

あなたは～神を～信じますか～

この世界は神によって創られた
この世のすべては神の御業によって動いている
神に祈れば幸せがくると
誰もが神に祈りを捧げる

この寒い星空の下
貧しき母親と小さき娘のささやかな祈り
寒さをしのげる部屋と空腹を満たすだけの食べ物と
そして親子二人の幸せを
一心に祈っています
明日の朝には冷たい雪の下に埋もれるとしても
今は神を信じ
祈りを捧げています

弱者から搾取した富で
暖かい部屋の中で贅沢な晩餐をする亡者がいます
彼らは神を信じず
祈りを捧げることもしていません

幼き子供がナイフで切り刻まれて
川の辺に打ち捨てられています
わずかに残った左目が
天の神を見つめて祈っています
子供を切り刻んだ母親は
赤いワインを飲み干して
男とどこかに消えました

全知全能の神よ
あなたは
神を
信じますか

生きること　or　・・・・・

どうして君は生きているの
何でそんなにがんばって生きているの
生きているって・・・楽しい？

どうしてあなたは死んでいるの
何のためらいもなく手首を切って
死んでいるのって・・・安らか？

生きるためには何が必要なの
希望、幸福、夢、そしてお金

死ぬためには何が必要なの
失望、不幸、現実、そして薬

私はどちらを選ぶのかしら

生きるべきか

・・・・・

それは死神のみ知ること

†††††††

†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†

存在しない幸福

たとえば僕がここに存在しなかったとして
そしてみんなの心から消え去ったとして
それでも僕はここで生きている
赤く光る液体を体中にめぐらせながら
ここに生きている
別にみんなから忘れられたとしても
それはただの現象に過ぎない
心が張り裂けそうになるときに
零れ落ちるしずくが言葉になり
みんなの心に届いていただけ
張り裂けた心からは黒く変質した泥が流れ出すだけ
今はただ空を見上げて深く息を吸い込む
そのうち心の欠片が元通りになり
また張り裂けそうになっていく

零れ落ちる言葉はそれまでお預け
僕には存在しないことの幸せがあることを知っている
誰にも邪魔されない僕だけの世界

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0840q/

言霊詩篇　黒書

2011年1月13日21時05分発行